

実験しないでなにか言えるかというところ、だいたいは実験して、それから考察を述べていくということになりますね。そうではなくて、実験なしにできることの場合には、今度は理論というか、その方法というか、それでもって、紙と鉛筆と対象さえあればできる。ただし、文献調査というのは精密・僕も多少……。まず歌ってという形式があつて、その中に現代性でもなんでも持ち込もうとするから苦しいのですね。なんか自分のほうに表現したいものがあつて、それを求めて自分に迫って来るときに、歌という形式をつかまえた人の歌は、別に新技法は凝らさないけれども、やはり新しさを

いま大岡はもう一度詩を書けと言つたけれど、史伝なら書いてもいいなと思うことがある。小説ではないよ、僕の考えからいけばそうなる。詩で言葉の考え方を読者に伝えるのよりは、小説で話の設け方、つまりなぜこんな話に興味を持ったかとか、こんなふうに話を進めるかとか、そういうことを美術の方の話にひっかけて言うとか、そういう詩人としての心というのは、やっぱり美術で彼が欲しかったものだという気がするんです。明治の初頭の美術教育っていうのは明らかに実用教育、技術教育ですね。特に西洋美術の輸入というのははっきりと技術として入ってきている。今では芸

古典をどう読んできたか



●吉本隆明



短詩型の伝統と現在



●寺田透



●吉本隆明

詩歌の読み方

言葉つまりたる時を



●安東次男



●粟津則雄



●高階秀爾



＊

サンボリズムと遊び

＊大岡信

＊しかし、吉本さんの仕事は、吉本さんかどう考えていようと、それは断絶ということだけでは無いですね。たとえば初期歌謡の形態論をおやりになってますね。ああいうので、たとえば、前の行と次の行が喩の関係で結ばれているというようなことを取り出してきて論じる場合でも、ぼくなんか。寺田さんのおっしゃったことで、どうでしょう。たとえば近藤芳美以降の若いプロの歌人がいますね。そういう人達が一生懸命現代的であらうということ、たとえば塚本邦雄でも、岡井隆でもものすごく苦心していると思うんです。その苦心というのはあんまり認めがたいです。

＊あれを読むと、五七五の短い詩形のなかに出てくるいろんなイメージの物質感というかな、安東好みの言葉で言えば、その軟らかさと硬さとか、その逆転とかさ、実によく計算されていてね。だからあれを読んだあとでたまたま送ってきたほかの現代詩集を読むと、非常に平板に見えるんだね。

＊まあ、あの人たちは漢文を皆やっているからね。漢文っていうのは簡潔な言葉で多くのことを要約して言うのに適したスタイルですよ。日本語で正確に事物を表わそうとすると、どうしても微に入り細をうがつ説明が必要になる。そうまでいかになくとも、副詞や接続詞の果たす役割が大きくて、

＊俳人・歌人はそういうことについてはすごい伝統があるのにもかかわらず、その問題をわりあい無視しているんじゃないかと、う気はしてるんですね。一方におれば孤独だぞと言っている人がいるかと思うと、他方ではひたすら仲良くやろうという人がいるわけですよ。その両方を自分ひとり、

＊向こう気の強い人だから、そう思い決めてやってください。たとえば明治の俳人とか歌人は、正岡子規の場合なんか典型的だけど、俳句を書いて、短歌を書いて、これはだいぶん落ちるけれども、新体詩も書いてしょう。それからもちろん漢詩も書いてるわけね。そういうことをやっている。

著者——大岡信 他

OHOKA MAKOTO

発行——一九八三年四月二五日

乱丁、落丁はとりかえます。書店か小社にお申出ください。

詩歌の読み方

吉本隆明、高階秀爾、寺田透、安東次男、栗津則雄、三浦雅士

発行所——思潮社

〒一六二東京都新宿区市谷砂土原町三一五

電話 二六七—八一五三

振替 東京八一八一—二一

発行者——小田久郎

印刷所——

凸版印刷株式会社

定価——一、二〇〇円

詩歌の読み方

大岡
信

思潮社



大岡
信



詩歌の
読み方

目次

古典をどう読んできたか

— 10 —



吉本隆明

家学、その周辺
断想と架橋
抵抗感が欲しい
「発明」と「再現」
リアルということ
岡倉天心をめぐるって

サンボリスムと遊び

— 46 —



高階秀爾

漢文調の名英文家
フェノロサという存在／西洋美術界の動向
朦朧体批判にみる典型／性急な近代化のなかで
江戸と明治の文化的落差／行動によって詩を書く
教育者としての力量／遊びの精神の伝統
恋文の息づかい

短詩型の伝統と現在

— 78 —



寺田 透

生活詠の再評価／短歌と俳句のちがい
作品と作者の関係／芭蕉の精神
芭蕉の「卑屈さ」／中世美学の悲しさ
茂吉の「写生」をめぐるって／低い調への歌
表現のディアレクティック
現代歌人の問題

吉本隆明



詩歌への感応

— 122 —



吉本隆明

伝統詩と現代詩の軋み／「記」的散文
アエリアンという性質／無名のものとしての歌
安東次男氏の独吟／有明と中也
科学的な知識の運用と科学的な思考
日本語の抒情と日本語の必然／形と物・音と視覚
「人類」という普遍性はあるか／『本居宣長』

言葉つまりたる時を

— 172 —



安東次男

連詩の学び
言葉のつまりたる時を
連衆は幽魂
歌は広く見……
をきのたいふ
思ひきや

歴史を見通す眼

— 204 —



三浦雅士

「関係」の思想／異質なもののとの照応
紀貫之体験と蝶番
正岡子規は「巨大な場所」
「折々のうた」のモチーフ
近代的個我のゆくえ
豊饒への眺望感

寺田 透



粟津則雄



装帧

高麗隆彦

詩歌の読み方

大岡
信

吉本隆明

『古今集』にたいへん深い関心をもっているというのは、関係ありますかね、家学的なものと。

「『古今集』への接近は、現代詩を書いてきた結果としてそうなったんじゃないか、という気がしています。現代詩のことを考えてゆくと、たとえばメタファの問題がありますね。そういうことを考えながら読んでゆくと『万葉集』というのはよくにはどうも難しいのですね。今、吉本さんがずっとやっていられるのを読むとやっぱりこういうふうな深いところ

古典をどう読んできたか

。戦争中に小林秀雄とか保田与重郎とか、そういう人たちのものを読んで「はあ……」ということ、古典というものは

案外遠いものではない——そういうところから学んで、今
ばくが関心があるとすれば、なにかそれに対して、お礼参り
じゃないですけれども——お返しはお礼参りか知りません
けど、そうしようとしているだけですから。



* きょうは、古典をどう読んできたかということで、昔の話というのはなんだか照れくさいみたいな感じですけど、吉本さんにいろいろとお聞きたいこともありますから――

ぼくのほうがお聞きたい。大岡さんのところは、^{かがく}家学というのあるでしょう、そういう家の学問がありますか。それをちょっと聞きたくてね。

* とても家学なんてものはないですけども、おやじが歌をやってますから、その関係で、人間というのは字を書くものだというようなことは、子どものときから思っていました。ぼくのうちは、江戸時代には四谷見附の辺に屋敷があったらしいのですけれど

も、旗本なんです。維新で徳川慶喜について駿府へ落ちた一味です。それで、ぼくのひいじいさんは、三島の警察署長をやったりしていたそうですが、キリスト教にも関心があったらしく、うちに明治時代の聖書が何冊も、羊皮で装幀したやつがあったりするのですけれども、とにかく維新でスカンピンになったので、そういう意味ではかなり心理的にねじくれているわけですね。ぼくのおやじの時代も、ずっと貧乏暮らしが続いていたんです。ぼくのじいさんは、横浜の高等商業を出て神戸の貿易会社へ入り、その後自分で貿易商社を経営したんですが、第一次大戦後の不況でつぶれ、大正の末ごろ上海にとび出したんです。上海で貿易をやっていたんです。その当時の中国人の大型の名刺がずいぶん残ってます。それから向こうの掛け軸とか筆とか、そんなものもなんとなくゴソゴソと残っていたりするのですが。言ってみれば夜逃げするみたいに女房、子ども置いて行っちゃったんですね。そのまま向こうで脳溢血で死んでしまいました。ぼくのおやじは旧制中学出てすぐに小学校の代用教員になって――。

・大岡さんのところは、家学というのがあるでしょう、そういう家の学問がありますか。(吉本)

ですから、十代の終わりごろから苦勞したのですね。歌をやる前は詩を書いていたようにですけども、結局歌に行きました。ちょうどおやじの二十歳前後のころ、若山牧水が沼津にいたので、牧水系統の人たちはけっこういたのですけれども、おやじは独学で歌始めたのです。それからずいぶんたつて窪田空穂さんと知り合つて、それで空穂さんの弟子になったわけです。若いときからひとりて血路を開かなければいけない生活だったから、神経が昂つてることが多かったんでしょうね、書齋に木刀が置いてあつて、ぼくは、ガキのときからなにかというとおやじに「すわれ!」とやられました。正座させられて、木刀でガツンとやられてね。そういうのでしたから、家学なんでもではなくて、まあ没落士族の鬱憤やら離群癖やらと、集団のなかへはどうもうまく入り込めない精神状態というのが非常に家の雰囲気としてあつたですね。そういうことからくる影響はぼくにもあると思います。

大岡さんの『紀貫之』、それから『古今集』について「文学」に書いたのがありましたね。やっぱり、『古今集』にたいへん深い関心をもっているというのは、関係ありますかね、家学的なもの。

* ぼくの場合には、少年期から青年期にかけては『古今集』は全然読んだことはなかったんです。むしろ『万葉集』と『新古今集』で、おやじとしては、なんと言つても『万葉集』をまず読むべきである、ということだったと思うのです。『古今集』というのは、おやじのほうからは全然ないのですよ。

それはむしろ、大岡さんの一種の異端的なモチーフからですか。

* ぼくの場合には、『古今集』への接近は、現代詩を書いてきた結果としてそうなったんじゃないか、という気がしています。現代詩のことを考えてゆくと、たとえばメタファの問題がありますね。そういうことを考えながら読んでゆくと、『万葉集』とい

・家学なんてものではなくて、まあ没落士族の鬱憤やら離群癖やらと、集団のなかへはどうもうまく入り込めない精神状態というのが非常に家の雰囲気としてあつたですね。(大岡)

うのはばくはどうも難しいですね。今、吉本さんがずっとやっていられるのを読むと、やっぱりこういうふうな深いところから掘り起こさなきゃだめだな、という気がするのですけれども、ばくなりに考えてみて、現代詩の問題にわりと対応している問題点は、『古今集』にありそうに思ったわけです。たとえば『古今集』時代の詩人たちが、中国の詩の影響を受けてゆく問題を考えますね。そうすると、あの時代の連中がぶつかった問題は、明治期以後のヨーロッパの詩と日本の詩とのぶつかり合いの状況のなかでわれわれがかかえこんだ問題とわりあい重なるような気がしましてね。だからばくは『古今集』に感性的に入ったというよりは、むしろ批評的な感じで入ったわけですね。

それと、ヨーロッパの文学へのつつこみみたいのがあるでしょう。やっぱりそれも家学的なものかしら。そういうの関係ないでしょうか。

* ないと思いますね。ただ、じいさんが英語をあやつらなければならぬ商売だったせいか、わりと英語の本があったりして、そういうものへの好奇心はありました。おやじも英語と日本語の対訳本などを買って、独学していたようで、だいたい英文学、それもスペンサーの『フェアリー・クイーン』とかラムの『シェクスピア物語』とか、昔のものですけど、そういうものは中学時代から、学校で教わる英語とは全然別のものであるのぞいてました。しかし、そういうものより、むしろ中学時代の友達にフランス文学を読んでいるのがいまして、ボードレルとかポーとか、リラダンとか、そういうのを戦後すぐの時代に、中学三年のころでしたけれど、教えてくれるやつがいて、その影響のほうが強かったと思います。そいつが音楽気違いで、レコードもドビュッシーやなんかいいレコードを持っていて、屋根裏部屋でふたりでじーっと何時間も聴くとか、そんなことのほうが強いかなちで入ってきていると思います。だから中

・ばくなりに考えてみて、現代詩の問題にわりと対応している問題点は、『古今集』にありそうに思ったわけです。(大岡)

学を出るころには、フランス文学をやって、ヴァレリーとかボードレールとか、そういう人たちのものを原書で読みたいというくらいの気持だったですね。

大岡さんの古典論を読んでいて、バラック建てじゃないという感じがあるのですよ。だからこれは、家学として「これはやるべし」とか、近世で言えば「源氏物語は絶対やるべし」というのがあったのかなと感じたのですよ。

* いや、そういうのはないです。でも、おやじの書いているものを中学時代から読んでいたわけです。おやじが「窪田空穂全歌集の鑑賞」というのを毎月自分の雑誌に書いてまして、ぼくはそれを読んで短歌の読み方はだいたい教えられたという気持があります。戦争中、空襲警報なんかのときでも、よほどのことがなければ、電燈にかさを長くたらし、机の上だけちょっと丸く照るくらいにしておいて書いていましたからね。

なるほどね。

* おやじは、戦争でどうせ死んでしまうだろう、それまでの間とにかく何か生きてきた痕跡を、こういうものを書くというかたちで残したい、自分をそのなかにたたき込もう、という気持があったのだと思うですね。それがやはり、ぼくに強い影響を及ぼしているのではないかという気がします。おやじは「何を読め」とか、そういうことは全然言わなかったです。

窪田空穂の『新古今和歌集評釈』ってあるでしょう。そのとき読んだときにはあんまりいいと思わなかったですが、つい一、二年前に読んだら、またやっぱりいいですね。

* あの人は、自然主義時代に小説書いていたりしたのと、それから早稲田大学で教えなければならなくて、学生に教えながら勉強したらいいですね。つまり実戦の戦場で鍛えているところがあって、評釈で「オッ、これはすごい」と思うときは、たいいそ

ういう目が光っているところですね。

うん、うん。それはちょっとぼくは、びっくりしたというのはおかしいけれど、そのとき「そんなにこれ、面白くないよ」なんて思っていて、つい近ごろ「あらー」という感じでしてね。

* そうですね。それはしかし、非常にうれしいですね。空穂さんの口ぶりには、なんと言うか信濃なまりが——あるのですね。ものを書いていても少しテンポが違うのです。ちょっとゆるやかな感じで、きらびやかな感じではないのですね。たとえば茂吉だと、断定するでしょ。そういうところが空穂さんはないから、パツと目立たないというところがあるのではないでしょうかね。

そうなんだな。それが結局、ぼくらにはよく読み分けられなかったのでしょうね、きつと。ほんとうに一、二年前にきて「はあ……」という、これはやはりたいへんな仕事だという感じをもちましたけれどもね。そういうことっていうのはあるからな。

* そうですね。

自分自身がおっかない気がしますけどね。ぼくらが厚みがないですから、つまり、戦争中に小林秀雄とか保田与重郎とか、そういう人たちのものを読んで「はあ……」ということで、古典というのは案外遠いものではない——そういうところから学んで、今ぼくが関心があるとすれば、なにかそれに対して、お礼参りじゃないですけれども——お返しやお礼参りか知りませんが、そうしようとしているだけですから。

* すごくお礼参りをしているけれどもね（笑）。

そういう感じでやって、なにか、世代から世代へ受け継がれてゆく、そういうのはぼくなんかにはないですからね。すると、大岡さんのみているとやっぱこれ、家学ではないかと思ったのですよ。

・ 世代から世代へ受け継がれてゆく、そういうのはぼくなんかにはないですからね。（吉本）

* いや、いや、とてもそんな……。

香川景樹かなんかみたいに一対一で伝授されたというような、そういうものを感じますけれどね。

* 一対一はもう木刀とか竹刀^{しな}で頭をボカッとやられただけですな(笑)。強いて言えば、おやじが空穂さんに出会ってからの惚れ込み方というのを見て、はあ、男が偉い人に出会って惚れたときにはこういうふうになるんだなということですね、昔の人というのは、こわい、なという、そういう感じがかなり身にしみましたから、それがやはり、古典を読むときでも、一応、自分でこれはこうだろうと思ったときに、「待てよ、こわい人がなにか言っているのではないか」と思ったりなんかする、そういうブレイキにはなっていると思いますが。

断層と架橋

どうでしょう、話が少し真面目になってしまふのですけれども、ぼくなんかはそういうことと痛切に感ずるわけですが、つまり、ぼくらみたいなアマチュアというのがいて、アマチュアがアマチュアの問題意識というのを古典にもってゆく。そうすると、ぼくは、サイエンスのほうからの類推で言えば、あることをテーマにして論ずる場合には、必ずそれまでに存在している同じテーマについての論文の類^{たぐい}はことごとく網羅的に読みまして、そのうえに立って自分がプラス・アルファをとにかく加える、そういうのがいわばサイエンスというもののやり方です。そうすると、またそれなりにサイエンスの部門では文献も整備されてまして、まず一月くらい後れば、世界中のどこで誰が自分と同じテーマをやっている